

## 武田麟太郎と南進論著作

シャルル・マルタ・ドウイスシロ

(受理日二〇一五年十月五日)

### 一、はじめに

武田麟太郎(一九〇四―一九四六)は、戦前はプロレタリア作家として知られ、島木健作、高見順と並び、転向文学を代表する小説家と言われている。武田麟太郎は、明確な転向を宣言したことはないが、戦時中に徴用命令を受け、蘭印のジャワ島(現在のインドネシア)に赴いた。ドイツナチスのPK(Propaganda Kompanie)<sup>①</sup>から発想した宣伝部隊の一員として、一九四一年に東部第六部隊に入隊した。これは、町田班とも呼ばれた。このジャワ体験に基づく作品において最も代表的なものが、一九四四年に出版された『ジャワ更紗』(筑摩書房)である。ジャワ時代の作品群における彼の肯定的なインドネシア観は、『ジャワ更紗』に結実しており、戦時中の武田麟太郎の研究において最も重要な資料となっている。

一方、武田麟太郎は『ジャワ更紗』において、竹越与三郎『南国記』(一九一〇年)を参考にしたことを明記している。さらに武田麟太郎は、伊藤直矢『金儲けの爪哇』(一九二一年)、江川薫『南洋を目的に』(一九一三年)、加藤鏝五郎『蘭印は動く』(一九四二年)、入江寅次『明治南進史稿』(一九四三年)などの書名を記し、それらの文章を引用している。これらの著作は、明治期からの南進論を維持したものであり、武田麟太郎のインドネシア像と戦前の「南進論」との関係を示している。

本論文は、課程博士候補論文を構成する論文の一部として、以下の審査委員により審査を受けた。

審査委員…西原大輔(主任指導教員)、柳澤浩哉、中村春作、

有元伸子(文学研究科)

本論文は、戦時中のインドネシア、とりわけジャワ像の変容を明らかにする試みとして、『ジャワ更紗』における南進論著作の存在と、これに対する武田麟太郎の姿勢について論じるものである。周知のように、昭和期の「南進論」の特徴は、明治以降の「北進論」に対抗して、南へ向かう日本の植民地政策を促進する、いわゆる帝国主義的な言説であったことである。当時の海軍と陸軍との間の植民政策をめぐる論争が意識されていたことは、一九一五年に再出版された『南国記』の序文にも記述されている。エドワード・W・サイードはオリエンタリズムの問題を「著作と著者を引用するシステム」<sup>②</sup>として捉えており、帝国主義的言説における引用のあり方および表象の連鎖が重要な焦点となっている。武田麟太郎が南進論著作を引用したきっかけは、東ジャワ山中の農家に東郷平八郎、乃木希典の肖像を見たことにある。このようなインドネシア人における日本人の英雄との親近感、明治以降の南進論著作群に連鎖的に見られる。では、引用された南進論著作は、武田麟太郎のジャワをめぐる語りによつてどのように影を落としているのだろうか、まず、戦時中までのジャワに対する一般日本人の認識について再確認しておこう。

### 二、「爪哇」認識

戦前のインドネシアが南洋もしくは、南方という包括的な領域や地域の一部として認識されていたことは言うまでもない。戦前の日本人の南方認識については、人気漫画『冒険ダン吉』に代表される、熱帯、野蛮、未開の土人、肌の黒い怠けものといったイメージの頻出がしばしば指摘されている<sup>③</sup>。これに対し川村湊は、それをオリエンタリズム表象と捉え、それらは太平洋の

国々を中心とした、戦前から戦時中に至るまでの多くの植民地文学に見られると指摘した<sup>(4)</sup>。一方、このオリエンタリズム表象が実際にどれほど日本人の地域的認識を混乱させていたかについては、戦前のジャワ在留商人森亮太郎の話が興味深い。

戦勝国として日本が認識されたこと、出国手続が比較的楽で、上海・香港、新嘉坡と飛びとびに行けば、パスポートがなくても浴衣がけで下駄はいて出かけられたものだ、という話を聞いた。布哇え行くつもりで出たんだが爪哇へ来てしまったと今は亡きある古老から聞いたものだ。<sup>(5)</sup>（傍線筆者）

この滑稽な話は、インドネシア、とりわけジャワにおいて、オリエンタリズム的なイメージがほぼ一般的であったことを裏付けている。「南洋」もしくは「南方」という定義の曖昧な言葉は、このジャワ島（インドネシア）に対する希薄な地域認識にも貢献している。「南方」は、日本の南に位置する陸地や諸島を指すものである。江戸期には新井白石が『南島誌』（一七一九年）において、沖縄本島を中心とする南西諸国という意味で用いている<sup>(6)</sup>。しかし、「南方」という用語が一般の人に広まり、国際的に特定の意味を持つようになったのは、日本の帝国主義が拡大した時期である。その焦点は台湾にあった。「南方」の概念は、一八九五年に日本が台湾を植民地として獲得し、後に国際連盟より南太平洋諸島の委任統治を任されたことで拡大した。先の引用に見られるように、第一次世界大戦の結果として、日本人は台湾、香港、シンガポールをはじめとする「南方」の地に自由に出入りした。

しかしながら、蘭領東印度（インドネシア）に関しては、低迷した国というイメージが継続した。インドネシアは、台湾と同様、「南方」と呼称される地域であるが、日本人のイメージとしては、ハワイなどの太平洋諸島の連想のほうが自然であった。当時のジャワを指す際に、「南方」および「南洋」が共に頻繁に利用されたことは、まさにその地域範囲にもなる認識の混乱を示している。このような用語の問題について、一九四二年の太平洋戦争の直前にジャワから帰国した高見順は、日本へ向かう船で日本人のジャワ在留商人から聞いた次のような話を記している。

ジャバは爪哇ジャバと書き、ハワイは布哇ハワイと書く。爪と布だけの違い。そこで

内地の人がジャバの人に手紙を出すとき間違つて布哇と書いた。そのためその手紙はハワイ中をさまよつて結局内地に戻され、内地からまた改めて爪哇へ送られてきた。その間、半年かかったといふ。ジャバはジャバでいいのに爪哇などといふ難しい字があるのが、そもそもいけないのだ。だがそれは字の間違ひといふだけでなく、ジャバもハワイも何かゴツチャにしてゐるところも、慥かにあつたにちがひない。<sup>(7)</sup>

ハワイとジャワ島との同一視は、無論「南」の地域における熱帯や「野蛮」のイメージに基づいている。なお、本来の「野蛮」概念においては、フェイ・阮・クリーマンが指摘するように、日本は中国の中華思想をモデルに、古くから「蕃」と「夷」といった中国の用語を日本語に採用していた<sup>(8)</sup>。中国人は明朝（一三六八〜一六四四）以来、台湾の先住民を「蕃人」と呼んだが、日本人はこの用語を受け継ぎ、先住民を「蕃人」「蕃族」と称した。さらに、アイヌ族や沖縄の民族などの原住民をはじめ、日本の領土に侵入してくる民族を「土人」として遇した。一六世紀、日本人はスペイン人やポルトガル人などの西洋人を「南蛮人」と呼んだが、この言葉には野蛮という意味も含まれている。このような他者としての認識は、脅威と恐怖に基づいているが、あくまでも野蛮性の基準は中華文明との距離にあった。

従つて、インドネシアは、台湾とは異なり、漢字、思想などの中国文化の影響が少ない地域であり、まったく異文化圏であった。インドネシアは、中華文明の及ばない、矢野暢の指摘にあるように、まったく「理」のない熱帯地域と見なされ<sup>(9)</sup>、文化的にはきわめて低い段階にあるとされた。戦時中のインドネシア認識においては、武田麟太郎を含む多くの日本人作家の描写に、インドネシア経済の支配者として華僑がよく現れてくる。このような描写は、原住民の文明に対する中華文明の優位性を意味することがある。これは同時に、「他者」の出現でもあった。華僑は、中華文明から離れた移民であり、「野蛮」な経済活動によって原住民の富を奪つたと見なされた。華僑はインドネシアの原住民の脅威として描写されている。すなわち、インドネシアにおける「中華文明／東洋文明」を両義的に捉えたことが、戦時下のインドネシアにおける日本オリエンタリズムの特性として考えられるのである。

昭和期において、中華文明に対するこのような両義的な捉え方には、日中戦争の泥沼化という背景があった。姜尚中の指摘にあるように、白鳥庫吉の

『東洋史』において、「日本は「東洋」の一部でありながら、「東洋文明の粹を集」め、「東洋」の文化と西洋の文化を混交させて、西洋と同じような「進歩」<sup>10)</sup>「文明」の道を歩むことができた」というアイデンティティーが既に成立していたという要因もあった。明治以降の日本は周知のように、自ら進んだ西洋文明を取り入れ、近代化を進めた。その結果、アジアの国々に対する「野蛮性」の基準や見方は西洋文明を中心としたものに転換した。西原大輔は、谷崎潤一郎の一九一七年以降の「支那趣味」作品に見られる中国観について、西洋を中心とした世界観の中での、周縁部分に位置する中国という見方が現れていると指摘している<sup>11)</sup>。その背景としては、西洋諸国が近代の力により、多くのアジアの国々を植民地として獲得したことがあげられる。このような文明基準の展開は、東洋文化から、西洋文明への優位性の転換によって説明される。西洋帝国主義との連携によって、中国のみならず、西洋諸国に植民地化され支配された民族が「野蛮」とされているのである。インドネシアを支配した西洋（オランダ）の植民地主義について、高見順の紀行文に次のような記述がある。

色こそが少し黒いが、日本とよく似た顔や身体つきをしてゐる。この日本とよく似たインドネシア人を、誰が、このやうな憐れな恥づべき卑屈さに落したのであらう。（中略）同じ人類が、人類をこのやうな卑屈な人間に人為的に変へて了ふとは、——人類への許しがたい罪悪。私は、だが、白人の支配者をその点で必らずしも糾弾しようとするのではない。白人の支配者が現れる前は、土民はもつと卑屈に生きねばならなかつた、と白人は言ふ。同じ民族の支配者の圧政から、むしろ救つたのだと和蘭人は言ふ。それは或はほんたうかもしれない。<sup>12)</sup>

このような西洋（オランダ）の植民地主義に起因するインドネシア人の「卑屈さ」については、「人類への許しがたい罪悪」であることを、高見順は自覚していた。しかし、のちに西洋の植民地主義に賛同したのは、高見がまさに西洋的「文明」を身にまといつていたからであつた。西洋人の「理性」に依存するジャワ認識は、武田麟太郎が引用した他の南進論著作の中に多く見られ、武田の批判の対象となつている。武田麟太郎が最も多く引用した南進論著作、すなわち『金儲けの爪哇』『南国記』および『南洋を目的に』を考察

することによつて、武田麟太郎における戦前の「南進論」的インドネシア像を見ていこう。

### 三、表象の連鎖

武田は「日本人に対するインドネシア人の信頼感と親密感」の原因を探るという設定で『金儲けの爪哇』と出会い、戦前に蘭印（インドネシア）へ進出した商人たち、いわゆるジャワ在留邦人の貢献を語り始める。武田の歴史語りにおける文献の出発点は、伊藤直矢の『金儲けの爪哇』にあつた。『金儲けの爪哇』の著者伊藤直矢という人物は、明治期にインドネシアへ進出し、商売で成功した商人の一人であつたと思われる。主な活動地域はジャワ島であり、六年間の滞在経験に基づく文章が、長谷川善作編『海外移住新発展地案内』（一九二一年）に収められている。『金儲けの爪哇』は、主にジャワでの商業のノウハウを提供するものだが、ジャワのイメージについては次のように表現されている。

彼等は南洋といへば、連も人間等は住めぬ程暑い上に、恐ろしい猛獣毒蛇などが群棲し、且つ昔語の探検記などにあるやうな不可思議な、奇妙な世界である、従つて冒険的好奇心を満足させるには足りるが、真面目に事業などの成し得られる所ではないやうに云つて居る。固より所異れば品異るで、奇妙な風俗、不可議な現象の、随所に多きは勿論であるが、然しそれが為に彼の地に於て為すべき事業が無い、有つても甚だ困難であると思ふのは大間違ひである。<sup>13)</sup>

伊藤直矢には、野蛮なインドネシアというイメージを先入観として否定する姿勢が見られる。しかし、日本との比較において、「即ち我々よりも下等の未開民が大部分を占め、又蘭人とても今日にては我が日本を非常に尊敬して居る。」<sup>14)</sup>と述べている。つまり、この伊藤直矢の姿勢は、文化的意味での偏見の解消を目指したものである。一方、「故に日本人を野蛮人扱ひ、半獣扱ひにする米国と、高等優秀の人種として尊敬する爪哇とでは、日本人の価値境遇は、殆んど奴隷と主人との如きものである。」<sup>15)</sup>とあるように、

アメリカでの日本人に対する偏見と差別という明治期の移民問題をも背景にしている。伊藤直矢は、西欧人に奴隷同然の扱いをされるといふ点において、日本人とインドネシア人が同じ立場にあるという見解を示し、外国進出に伴う不安感、恐怖および西洋人に対する劣等感を裏返した感情を表明している。伊藤直矢が『日本事業新報』の一九一一年十一月に掲載した記事は、「爪哇更紗の話」というタイトルであった。このタイトルが武田麟太郎の『ジャワ更紗』と酷似しているのは、偶然かもしれない。しかし、武田麟太郎は、このような日本人が共感できる「奴隷同然の扱い」のイメージも享受しつつ、オランダ＝西洋を敵視している。

オランダ人の政策は、周知のやうに、原住民にオランダ語を注入しない行き方であった。奴隷である彼らが優れた白人の言葉を使つたりするのは以てのほかであるとした。自分たちの会話が彼らに理解されるのを悦ばなかつたとも伝へられるし、また迂濶にオランダ語で話しかけたり返事をしたジャワ島人が、叱責され罰しられたとも云ふ。<sup>(16)</sup>

このような同情は、『金儲けの爪哇』における「独り大和民族の祖先たる馬来人種の故郷たり、又徳川氏中世に於ける吾が不遇英雄の功名地たりし点より云つて、吾が日本との関係は蓋し少からざるものである。」<sup>(17)</sup>という過去におけるロマン的關係に連続している。日本のオリエンタリズム言説における同一性論の原点は、日本人の南方起源論にあると考えられる。このような日本とインドネシアの關係は、当時の外国に進出していた商人の中に多く見られたもので、歴史としてよく語られている。例えば、大久保伝重郎の『南ボルネオと草分けの人々』には、次のような記述がある。

元々インドネシアと日本の關係は地理的にも歴史的にも随分深い事は事實である。史実に基けば十四世紀から十七世紀にかけて南方との關係は古くは倭寇、八播船、琉球船より九州の諸大名や豪商が競つて南洋交易を盛んにし巨万の富を得着々と実力を蓄積した御朱印船時代迄続いた。<sup>(18)</sup>

このような日本人との關係の描き方は、『金儲けの爪哇』より一年前に出版された『南国記』に既に見ることが出来る。『南国記』の重要な点は「日

本人を南方起原の「南人」と捉え、日本人の「北進」は歴史の約束に反する<sup>(19)</sup>という主張にあった。従つて、『南国記』の南方起原論は、日本人の目を南に向けさせる理論として機能したものの、明治精神を貫く、いわゆる日本人の西洋中心主義的な見方があくまでも優先していた。その結果、竹越は『南国記』においてインドネシア人を自立できない怠け者の「土人」として次のように描いている。

是れ爪哇人、久しく奴隷の境界にあり、卒然として解放せらるゝも容易に自から方向を定めて自立する能はず、且つ怠慢、性となりて、他より強迫する者なくんば、努力勞役するの氣魂なく、耕作者は其賃銀を増加して、勞力を得んとするも容易に之を応ずるものなく、其結果として農業は衰退し、貿易は縮小するに至りたりき。<sup>(20)</sup>

この描写は、当時のインドネシアにおける英国の自由主義的な植民地政策と關係し、支配者としての西洋人と同様の目線で觀察したものであるといふ他はない。さらに、『南国記』においては、次のように表現されている。

余は此間、爪哇土人に荷物を運ばしめ、或は物を買はしめ、報酬として銀錢を与ふるに、彼等が下座して、手を重ねて受くること古の我國の穢多族が良家に到るが如くなるを見る。<sup>(21)</sup>

そもそも、日本の封建社会においては、如何なる秩序や身分にも属さないものが偏見と差別の対象とされた。西洋文明にも東洋文明に属さないインドネシアの「土人」は、それと同じように、「非人」の民族として扱われている。竹越が見た「手を重ねて受くることと昔の我國の穢多族が良家に至るが如く」というインドネシア人は、ホテルやレストランなどで働いていた当時の「ボーイ」や「ジョゴス」としてのインドネシア人であったかもしれない。しかし、一般のインドネシア人に対してもこのような偏見を持ち、怠けものの奴隷としてのインドネシア人のイメージを「ジョゴス」に代行させる。

竹越は「土人日本を好む」の箇所において、ジャワの王子であったジッポネゴロ (Diponegoro) のジャワ戦争や、スマトラ島のアチェ (Aceh) 戦争などの、西洋に対するインドネシア人の抵抗を記録し、強い民族として印象

づけている。しかし結局は「然るに此マレー人は今や日本が海表に崛起し、一戦して支那を破り、再戦して露国を破りたるを見て、欧州人にあらざる者、また能く為すに足るとなし、恰かも旅客が長夜を脱して暁星を望みたるが如く、日本人を思慕するもの少から」<sup>(22)</sup>と述べている。彼の南方起源論は植民地政策に向かっており、民族統制や支配への欲望が潜んでいたことは明らかである。

矢野暢は、近代日本人の「南進」を三つの時期に区分し、「からゆきさん」や小商人などによる明治初年の日本人流出を、第一の「南進」としている。その特徴は、国策と無関係な平和的活動であったことにある。第二の時期は、太平洋戦争及びイデオロギーとしての大東亜共栄圏を背景にした一九四〇年から一九四五年までの時期である。事業、商売から帝国主義的な植民地政策へのこのような転換は、一九三〇年代にあったとされている。しかし、右記の『南国記』の引用を見ると、インドネシアにおける植民地支配の傾向は、すでに一九一〇年代に見られる。

この南方起源論は、江川薫の『南洋を目的に』にも影を落としている。江川薫は、「南へ、は近時識者の定論なり」という『南国記』の名言を引用しており、『南洋を目的に』における日本人の南方起源論を支持している。江川薫は、インドネシアと日本の深い関係を豊臣秀吉の時代にまでさかのぼり、インドネシアに渡り海賊のリーダーとなった長崎出身の商人、原田孫次郎の伝説とつなげている。しかし、江川薫が最も信奉したのは、人類学の日本人の南方起源論である。日本人とインドネシア人との血縁関係については、以下のように記されている。

人類学者の言によれば馬來人種と亜細亞人種とは同一種族に属すといへり。殊に馬來人と日本人の酷似せる事は他外国人の眼より見る時は、一見識別に苦しむ程なり。(中略) 亜細亞人種中支那人の大陸的ヌボー式なるに反して朝鮮人は亡国的顔相を有す。然るに此点に於て馬來人は最も善く日本人に類し、皮膚の黒色なるは異れども毛髮其他の点に於て朝鮮人以上に類似せるを知るべし。或る学者の如きは日本人の祖先は馬來人なりとさへ言へり。<sup>(23)</sup>

武田麟太郎も、この南進論的な南方起源論と全く無関係だったわけではな

い。彼は、インドネシア人との同一性論も展開しており、『なつかしい風物』(一九四二年)において、次のように記述している。

いつか東京とこちらの距離を忘れてしまつて昔からずつと住みなれてゐるやうな錯覚を起すのだ。誰でもいふやうに椰子の木さえへなければ、日本と少しも変らぬ景観の故でもあらう。暗闇を縫つて青白く螢がとんでゐる。あゝ、ここはたしかに一度来たことがあるという感じがして、全くはじめて踏んだ土地とは思はれない。自分の血のなかには、ここをよく知つてゐるものが流れてゐるのを自覚するのだ。<sup>(24)</sup>

この文章は、日本人との血統関係の比喩でもあり、いわゆる「昔からずつと住みなれてゐるやうな錯覚を起す」という記述は、南方起源論を連想させる。さらに、江川薫は、「予が南洋の各地を巡遊せる際、其風光と四圍の事情とは少なからず此土地に愛著の想を起さしめぬ」<sup>(25)</sup>と述べている。江川薫は南進論の論者の中で最もジャワの自然に愛着を示した人物であり、武田麟太郎と江川薫には共通点が見られる。しかし、武田麟太郎は本来、南方とは無関係な作家であり、太平洋戦争の拡大によって、初めて陸軍宣伝班員としてインドネシアに赴いた。旅行、冒険、商業などという目的とは異なり、彼が初めて踏んだインドネシアの地は、占領地もしくは戦場であった。無論、武田麟太郎の背後には太平洋戦争があり、「大東亜共栄圏」思想という新たな帝国主義言説の影があったことは言うまでもない。彼の使命は「文化工作」<sup>(26)</sup>であり、その仕事の内容について次のように記されている。

これらの文化人が各自の立場から真摯な態度をもつて古き原住民文化を探検しつゝあることは、もつとも注視すべきである。政治の面において現状復帰が先づ取りあげられたごとく、文化育成の前提として東印度のオランダ支配以前の文化の発掘と保護が必要である、しかし南方における文化政策は第一線の少数の文化人にのみ委せらるべきではなく、日本国民全体の肩にかゝる問題である。わが南方圏の外周として回教圏と直接に接触するに至つた現実に鑑み、回教の研究、回教政策の樹立が真剣に考えられねばならぬ。<sup>(27)</sup>(傍線筆者)

そのため、異文化理解という点で、武田麟太郎は戦前の南進の著者と非常に異なっている。たとえば、江川薫はイスラム教における一夫多妻制度を、「土人は性来の多淫と相待つて多妻を實行する事驚く可し。地方の豪農又は酋長等にして数十人の妾を有し百人以上の子女を有する敢て珍となさず、彼等は旦に同棲して夕に離別するも決して意に介せず」<sup>(28)</sup>と描写するのに対し、武田麟太郎は、「永く根強い悪習は一挙に打破出来ない」<sup>(29)</sup>と解釈し、一夫多妻制について肯定的に捉えている。さらに、武田麟太郎は、次のような相対的な判断も示す。

事実、統計を見ても、ジャワでは調査不詳を除いて一夫一妻は九六パーセントで、一人以上の妻有る者は一・九パーセント、即ち、百人に二人もゐないのである。まして、四人もゐるのは〇・〇一パーセントであるから、一万人に一人もあるかなしだ。<sup>(30)</sup>

右の記述から見ると、武田麟太郎のインドネシア文化に対する理解が非常に深かったことは確かである。武田麟太郎は劇団研究所に勤め、一九四三年の四月には「啓民文化指導所」(Poestri Keloedajaan)の文学指導委員となり、多くのインドネシア人文学者と接触している。自ら志願した延長期間を含む二年間の宣伝活動において、武田麟太郎はジャワ島とバリ島の町や田舎を巡回し、バタビア(ジャカルタ)のカンポン(下町)にも頻繁に出入りしていた。当時の巡回活動は、「ジャバのフクチャン」に記録され、『東京朝日新聞』朝刊の一九四二年六月二十一日〜七月三十一日の記事に連載された。このような原地住民との接触によって、武田麟太郎のインドネシア像が作り出されたのだろう。

#### 四、おわりに

以上、武田麟太郎と、引用された南進論の著作を分析し、連鎖する南方起源論のイメージについて考察した。明治末期の南進論著作以来継続してきた日本人の南方起源論も、彼に影響を及ぼしていることは明らかである。しかし、南進論の著作から大量の引用を行っている一方で、偏見に基づく文明観も批判している。武田の批判の鋒先は、「毛唐流の立場と見方」並びに、「同じ原

本」および「内容の重複」<sup>(31)</sup>にあった。つまり、武田麟太郎の批判の対象は、日本人による西洋的な民族観のみならず、インドネシア言説における偏ったイメージの連鎖にも向けられていたのである。武田麟太郎が、南進論著作におけるインドネシア像の偏見を自覚していたことは明らかである。彼は「大東亜共栄圏」思想という新たな日本の帝国主義言説と厳密に連携していたが、明治以降の日本のオリエンタリズムにおけるインドネシアの偏見を変容させた人物でもある。この意味で武田麟太郎の『ジャワ更紗』は、もうひとつの日本のオリエンタリズムの特性を浮かび上がらせるものである。

#### 【注】

- (1) 神谷忠孝「南方徴用作家」、『北海道大学人文科学論集』二〇号(一九八四年)参照。
- (2) Edward W. Said, *Orientalism*, (London: Penguin Books, 2003), p.23.
- (3) 矢野暢『日本の南進論と東南アジア』(日本経済新聞社、一九七五年)、一四一―一五頁。
- (4) 川村湊『南洋・樺太の日本文学』(筑摩書房、一九九四年)、六五―六七頁。
- (5) 武田重三郎編『ジャガタラ閑話——蘭印時代邦人の足跡』(出版社出版年不明)、一五四頁。
- (6) 村井紀『南島イデオロギーの発生——柳田国男と植民地主義』(福武書店、一九九二年)、八頁。
- (7) 高見順『蘭印の印象』、『高見順全集一九卷』(勁草書房、一九七四年)、四九頁。
- (8) フェイ・阮・クリーマン『大日本帝国のクレオール(植民地期台湾の日本語文学)』(慶応義塾大学出版会、二〇〇七年)、一二二頁。
- (9) 矢野暢『日本の南進論と東南アジア』(日本経済新聞社、一九七五年)、一四頁。
- (10) 姜尚中『オリエンタリズムの彼方へ——近代文化批判』(岩波書店、二〇〇四年)、一五三頁。
- (11) 西原大輔『谷崎潤一郎とオリエンタリズム——大正日本の中国幻想』(中央公論新社、二〇〇三)、七四頁。
- (12) 高見順『蘭印の印象』、『高見順全集一九卷』(勁草書房、一九七四年)、

- 二三頁。
- (13) 伊藤直矢『金儲けの爪哇』（実業之世界社、一九二二年）、七―八頁。  
 (14) 伊藤直矢『金儲けの爪哇』（実業之世界社、一九二二年）、八―九頁。  
 (15) 伊藤直矢『金儲けの爪哇』（実業之世界社、一九二二年）、九頁。  
 (16) 武田麟太郎『ジャワ更紗』（筑摩書房、一九四四年）、五四―五五頁。  
 (17) 伊藤直矢『金儲けの爪哇』（実業之世界社、一九二二年）、四頁。  
 (18) 武田重三郎編『ジャガタラ閑話——蘭印時代邦人の足跡』（出版社出版年不明）、四八頁。
- (19) 矢野暢『南進』の系譜（中公新書、一九七六年）、六二頁。  
 (20) 竹越与三郎『南国記』（二西社、一九一五年）、一六一頁。  
 (21) 竹越与三郎『南国記』（二西社、一九一五年）、一二二頁。  
 (22) 竹越与三郎『南国記』（二西社、一九一五年）、一八三頁。  
 (23) 江川薫『南洋を目的に』（南北社、一九一三年）、一三六頁。  
 (24) 武田麟太郎「なつかしい風物——親しみ易いジャバの印象」、『東京朝日新聞朝刊』一九四二年四月一日付、四頁。
- (25) 江川薫『南洋を目的に』（南北社、一九一三年）、一九三頁。  
 (26) 神谷忠孝によれば、「文化工作」の目的は三つに分けられる。第一は対占領地宣伝、第二は対軍隊宣伝、第三は対敵宣伝である。「南方徴用作家」、『北海道大学人文科学論集』二〇号、一九八四年。
- (27) 「前進せよ、文化政策」、『大阪朝日新聞』一九四二年六月五日付。  
 (28) 江川薫『南洋を目的に』（南北社、一九一三年）、一四九―一五〇頁。  
 (29) 武田麟太郎『ジャワ更紗』（筑摩書房、一九四四年）、一一二頁。  
 (30) 武田麟太郎『ジャワ更紗』（筑摩書房、一九四四年）、一一二頁。  
 (31) 武田麟太郎『ジャワ更紗』（筑摩書房、一九四四年）、二頁。

Takeda Rintaro and Literature of the “Southern Expansion”

Syahrur Marta Dwisusilo

**Abstract:** During the Asia Pacific war, Takeda Rintaro published *Java Sarasa* (1944) which became the most prominent work about Indonesia. Takeda Rintaro is a Japanese writer who had been assigned and ordered by the Japanese army as a member of propaganda unit in Java. He quoted several important references such as *Nangokuki* (Chronicles of Southern Countries) (1910), *Kanemoke no Jawa* (Making Money in Java) (1911) and *Nanyo wo Mokuteki ni* (1911) (Southern of Destination) to depict the romantic relationship between Japanese merchants and native people of Indonesia. The references quoted by Takeda mention the discourses of the Southern Expansion at the end of the Meiji era. Java was identified as a part of “Southern Area” (*Nanpo* or *Nanyo*), which had similarities to other Pacific islands such as Hawaii. Discourses of the Southern Expansion were associated with images of the primitive southern islander (*tojin* or *dojin*), in which Takeda asserted that the racial discrimination and stereotyping of Indonesians as the results of westerners’ perspectives. This paper observes the relation between the Southern Expansion references with Takeda Rintaro’s writing about Indonesia during Japanese occupation. The result of the analysis shows that Takeda Rintaro’s writing on the image of native Indonesian was also constructed based on the theory of Japan’s Southern Origin, which was usually applied on the Southern Expansion discourses. The similarity of anthropological identity laid the base for arguments to depict the relationship between Japanese and Indonesian.

Key words: Takeda Rintaro, Indonesia, Southern Expansion, Orientalism

キーワード：武田麟太郎，インドネシア，南進論，オリエンタリズム